

Title	狩猟時代に備えて：アクティブラーニングの勧め
Author(s)	小川, 洋
Citation	ぱびるす：聖学院大学図書館報 / 聖学院大学総合図書館, 第 58 号, 2014
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5191
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

ぱびるす



聖学院大学総合図書館報

第58号 (2014年春)

アクティブラーニング
特集号



狩猟時代に備えて アクティブラーニングの勧め

小川 洋



江戸時代の実話。ある藩の家臣たちは粗暴な振舞いの目立つ世継ぎの若殿に手を焼いていた。ある時、学問をさせれば思慮深く性格も穏やかになると考えた家老が儒者を招くことにした。

挨拶に現れた儒者を前に若殿は、「学問をすれば、やたらと腹を立てたりすることもなくなるのか」と問うた。儒者は「その通りでございます」と答えた。若殿は突然、儒者に歩み寄り、その襟首を掴んで足払いを掛けた。多少無然とした表情で座り直した儒者に、若殿は「腹立ちを覚えておるようだな」と言いながら再び転ばした。儒者は憤然としてその場を去った。

恐らくこの若殿、学問とは聖人君子の言葉や事績をただ覚えることだと考えていたのであろう。しかし江戸時代の日本人はもっとアクティブな学問を好んだ。優秀な儒者たちは、生徒たちに聖人の言葉をさまざまに解釈して議論することを奨励した。評判の良い塾には全国各地から人々が集まり、そこからはまた優秀な学者が育った。若殿が良い師に恵まれ、学問とは知恵を出し合うことだと理解し学問の面白さに目覚めることがあったな

らば、名君になったであろう。

ところで明治以降の日本では、学問は欧米の知識を吸収することと同義語になり、学校は与えられる情報をひたすら吸収する場になってしまった。事情はヨーロッパでもあまり変わらない。とくに大学図書館は真理を語ったギリシャ以来の哲人たちの高邁な言葉に触れる神聖な空間であった。

しかし今や、あらゆる情報はデジタル化され一瞬にして世界中を駆け巡る。一人静かに古人と対話する時間も大切だが、仲間と情報を集め、知恵を出し合って状況を切り拓いていかないと世界から取り残される時代だ。獲物を追って狩りをしてきた時代から、人類はいつも互いにアイデアを出し合って生きてきた。マンモスを集団で追っている姿を想像してみよう。その意味では現代は、再び狩猟時代に戻りつつあるのかもしれない。

いま世界中の図書館は変身中だ。従来の活字情報に加えてネット情報にもアクセスしながら集団的な学習をする場が変わりつつある。聖学院大学にもアクティブラーニングの環境が用意されるようになった。仲間ゼミの準備をするもよし、議論しながら授業の宿題に取り組むもよし。積極的な活用を待っている。

(政治経済学科・基礎総合 教授)